

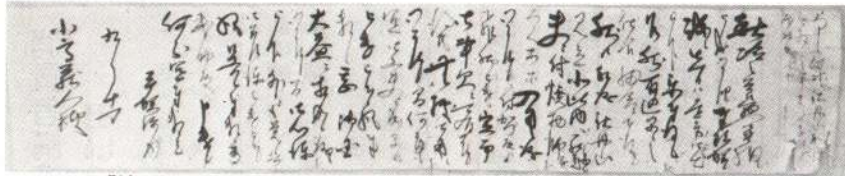
大館の歴史散歩

火内の山々 ⑩

針丹山

大館市に針丹山という名の山は存在しない。が、それは大館の歴史上忘れることのできない名称である。

安永二年(一七七三)九月十日



▲『鳩裕平賀源内書』平賀源内自筆の書簡(大館市立中央図書館蔵)

天下の奇才平賀源内が沼館村(現大館市沼館)に入った。当時、佐竹藩では藩財政政策の一つとして、鉾山開発と精練法改良を図っていたが、そのために招聘したのが、平賀源内と吉田理兵衛であった。兩名は同年七月十二日に院内に入り、のち久保田、阿仁そして源内は前述の沼館村に入った。

沼館に入った理由は、小高蔵人にあつた書簡(『鳩裕平賀源内書』大館市立中央図書館蔵)で「前略」然ハ、私儀、針丹山見立、北比内へ罷越候(後略)と針丹山(針丹を産する山)を探鉾するためとしており、書簡附文に「尚々、此地、針丹山、和漢無双之事共ニ御座候、武助殿へ御聞可下被候」と記している。末文の武助とは伊多波武助ではなく、源内から蘭画を指導伝授され、佐竹義敦(曙山)とともに秋田蘭画を確立し、「解体新書」の挿絵を書いた小田野直武のことである。

源内が沼館に入った記録は、『温古家宝集録』(国立史料館蔵・荒谷家文書)にも「安永二巳八月六日、阿仁御山より御才足罷出候処、平賀源内殿、吉田理兵衛殿、付添御用被仰付、夫より比内沼館山、赤石鉛山相勤(後略)」とあり、赤石脂採掘が目的だったとある。赤石脂については菅江真澄も「霞むつきほし」に「この長坂といふを下るに、坂中に赤石脂あれと、比内の郡なる沼楯に産るとは、しなくたれり」と記している。源内は九月十日から十月十四日までの三十四日間、沼館で探掘にあつたが、結果は失敗であつた。沼館の桜庭家には、「安永三年午三月吉日、当村支配山金掘沢御取立ニ付、御渡残銀被下置段、書附を以願申上候書留帳」という源内の赤石脂探掘の経費勘定書があつて、それによると「旅籠代、諸道具代、酒代」等の諸経費合計が五十六貫六百五十八文で、他に赤石脂二十俵の能代までの運送代が一貫三百文であつたことも記されている。

針丹とは垂鉛のことである。赤石脂が垂鉛なのか、沼館に言い伝えられるマンガン鉾なのかは不明で、源内の失敗原因は針丹を採掘しようとして、赤石脂をそれと誤認してしまつたことによるとも考えられなくもないが、しかし真相は謎である。失敗はしたものの、江戸時代中期の天下の奇才平賀源内が、長く大館の地に滞留して針丹山(沼館北方の山沢一帯地域)の探掘にあつた事実、大館の歴史に記録されてよいトピックであつたといえよう。

市役所史跡探訪会

私の本棚

中央図書館新着図書

一般書

- ◇〔ロス発〕第1級殺人の女 (和久峻三) ◇それでも明日は来る (三浦綾子) ◇海馬 (吉村昭) ◇墨ぬり少年オペラ (阿久悠) ◇イワシと逢えなくなる日 (河井智康) ◇銀座物語 (黒井千次) ◇陽と風の道標 (戸井十月) ◇ビジネスマンの父より娘への25通の手紙 (キングスレイ・ウォード) ◇青い目茶色い目 (ウィリアム・ピーターズ) ◇クロワッサン症候群 (松原惇子) ◇土地の神話 (猪瀬直樹) ◇母送りの記 (木村梢) ◇平安初期彫刻の謎 (松村史郎) ◇感性の磨き方 (国司義彦) ほか

『土にいのちと愛ありて』

島 一 春 著 河出書房新社

農業と化学肥料による汚染が指摘される今日の農業。食物に残留する農薬が人間の体を蝕み、大自然そのものをも破壊しかねないと著者は警鐘する。ここに自然農法を実践し続ける一組の夫婦がいる。

- ☆2月のテーマ関連図書コーナー：『男と女』
- ☆親子読み聞かせ会：毎週金曜日午後2時半から
- ☆中央図書館の休館日：2月19日、23日、24日

移動図書館車「おとり号」巡回日程変更のお知らせ

2月24日(金)巡回予定の十二所IIコース(沢尻)(花田一宅)、〔別所〕(別所会館)、〔東台3区〕(消防東分署)の巡回日を、2月28日(火)に変更させていただきます。